

元の閨秀鄭允端の文學

はじめに

女流詩人の詠じた古典詩歌は、やもすれば唐詩・宋詞に盡きてい
るように受けとられがちであるが、じつはそうではない。女性が獨自
の文學を意識するようになるのは、むしろ元代より明代にかけて、詩
作の擔い手が官僚から一般の市民層にまで廣がった時代に於てである
ように思う。

鄭允端(字は正淑、一三三七〜五〇)は元末に在世した蘇州の女流詩
人で、同郷の施伯仁(生没年未詳)に嫁ぎ、年僅かに三十にして夭折
したと傳えられる。この頃は楊維禎(二二九六〜一三七〇)を中心とす
る江南市民文學の隆盛期に當り、允端の現存の詩にも虞集(一三〇一
〜一四八)や倪瓚(一二三〇〜一七四)といった、當時の著名な文人の名が
見えている。また、允端の没年に當る至正十六年(一三五六)は、張
士誠(一三三二〜一六七)が擧兵して平江(江蘇省蘇州)に據つた年で、
『龍離集』の跋文及びその他の小傳にも、等しく允端の家屋が兵火の
ために破壊され、元來病弱であつた彼女は精神的に追い詰められて病
狀が悪化、急逝したという記事を載せる。

この他、元の代表的な女流詩人は「鸚鵡塚」の故事で知られる張玉
娘(生没年未詳)、趙孟頫の妻管道昇(一二六二〜一三一九)、『綠窗遺

小林徹行

稿』の孫淑(字は蕙蘭、一三〇四〜二八?)等、數える程しかない。
鄭允端はその數少ない元代女流詩人の中では頗る現存する詩が多
く、さらに殘存詩集の冒頭には自撰の題辭が冠されている。また、そ
の名は正史に記載されていないものの、當時は詩人として著名であつ
たらしく、名門の文人がその才を惜しんで詩集の序文を書いており、
後世多くの婦女文學史の專著にもその名を留めた詩人である。

宋以前の女性の手に成る詩文に於て顯著なのは、男性と同様の表現
を用いる點、言い換えれば、男性に評價されることを念頭に置いた作
品の多い點である。獨自の文學を強く意識し、また固有の文學觀を述
べている女性の文獻など皆無といつても過言ではない。しかしなが
ら、鄭允端は以下に詳述するように、女性としての立場や表現を尊重
し、後世の女性へのメッセージを主體にして獨自の文學を創造してい
るのである。世の女性を對象とした詩作、この點が從來の女流文學に
は稀薄であり、また詩中に女性の生き方を積極的に説いた女流詩人
も、鄭允端より以前に見出すことは困難のように思われる。

さて、鄭允端の詩がわが國に入つて來たのは、恐らく江戸時代の
『商舶載來書目』にみえる『名媛詩歸』所收の詩二十四首が最初にな
るのではないかと思われるが、翻譯詩として人口に膾炙しているの
は、佐藤春夫の『支那歷朝名媛詩鈔・東唐集』(昭和四年・武藏野書院

刊に收められた一首がその初めということになる。しかしながら、春夫は個々の別集に遡ることはせず、『名媛詩歸』『古今女史』など明・清に編まれた婦女詩の總集に依據して女流詩人の作品や傳について書いているようである。この『車塵集』の第二十首に允端の「水檻」の譯詩がある。

近水人家小結廬

川ぞひの小家のかまへ

軒窗瀟灑勝幽居

窗ゆかしよき庵よりも

凭欄忽聞漁榔響

立ちよれば櫓の音ひびき

知有小船來賣魚

小船來て魚を買へとぞ

周知のように、『車塵集』には奥野信太郎（一八九九—一九六八）の手に成る序文と譯者自身による解説文「原作者の事その他」とがあり、それぞれに鄭允端に関する一文がみえる。先ず春夫自身の記した附録の解説では、

十三世紀。吳中の施伯仁の妻である。その著を肅離集といふ。

今は傳はらない。（傍線は筆者、以下同じ）

とあるが、「十三世紀」は誤り、「十四世紀」でなければならぬ。また『肅離集』の名に觸れてはいるものの、現在は散佚したかのよう記されている。さらに奥野の序文にも次のような一節がある。

鄭允端は吳門施伯仁の妻、冷酷な性格をもつた夫のためにただ詩の世界にのみ安住の地を求めくらし寂しい生涯の女である。今この集に收められた詩を誦するにつけ、川ぞひの欄干、賣魚の聲に聴き入つてゐる彼女の靜かな詩心とその暗い家庭生活とについて細事を盡したい氣さへ起る。

右の傍線箇所は、恐らく『名媛詩歸』の小傳或は『古今女史』姓氏の記事、

元の蘭秀鄭允端の文學

鄭允端、吳門施伯仁妻也。幼穎慧、工詩書。夫性村惡不諧、作詩自遺。

に據るものと思われるが、これは現存の『肅離集』に附されている杜寅の後序にみえる、

予嘗嘆、夫世之婦人有才智者、常恨不遇其夫。今鄭氏適施君伯

仁。伯仁通古今學、儒雅之士也。夫賢其婦之才、婦喜其夫之學。

（予嘗て嘆す、夫れ世の婦人の才智有る者は、常に其の夫に遇は

ざるを恨むと。今、鄭氏は施君伯仁に適ぐ。伯仁は古今の學に通

ぜし儒雅の士なり。夫は其の婦の才を賢とし、婦は其の夫の學を

喜ぶ）

とはまったく噛み合わない内容である。一般に、世間の婦人で才智を備えている者が、無知凡庸な夫に嫁いでしまったことを後悔する、というのが一つの典型になつてゐるにも拘らず、施伯仁は古今の學に通じた眞の儒者であつて、彼は妻允端の才能を評價し、また妻も夫の學問に敬意を拂つたと杜寅は記している。ここで大切なことは、一般論として、例えば宋の朱淑貞（生没年未詳）のように凡庸な夫に嫁いだ爲に常に不遇な身の上を嘆く才女が多いという點であり、先の小傳の如きは『肅離集』を見ていない者の捏造にかかると思われるが、『名媛詩歸』のような選本の簡素な小傳の方が巷に流布する可能性は高いのである。

また、春夫の譯詩にしても、明代の婦女詩の總集のみに依據した爲に誤解した箇所があり、『車塵集』の後の版では原詩に於て少々無理な改作を行うに至つてゐる。岩波文庫の『春夫詩鈔』に『車塵集』を再録する際（昭和十一年）に、「水檻」の第三句「凭欄忽聞漁榔響」を、

凭欄忽聞漁榔響 立ちよれば櫓の音ひびき

と「漁榔」の「榔」を「楫」字に改め、これ以降『佐藤春夫全詩集』(昭和二十七年・創元社刊)や『美の世界』(昭和三十七年・朝日新聞社刊)に於ても等しく「漁楫」に改めている。現存の『肅離集』所收詩では「漁榔」を「鳴榔」に作り、これを参照していれば、翻譯する際に文字を改める必然性の無いことに氣付いたであろう。但し「鳴榔」の譯には二説あり、『文選』卷十の潘岳の「西征賦」中の句「織經連白、鳴榔厲響」に添えられる李善注にみえる、

説文曰、根高木也。以長木扣舷爲聲、言曳織經於前、鳴長根於後、所以驚魚令入網也。

のように、舟べりを鳴らして魚を驚かし、網の中へ追い立てる漁獵に用いる棒を指すとするもの(「根」は「榔」の異體字)と、李白の「送殷淑三首(其一)」にみえる、

惜別耐取醉、鳴榔且長謠。

や賂賓王「渡瓜步江」の句「鳴榔下貴洲」、或は沈佺期「早發平昌島」の句「鳴榔曉浪前」等のように、まったく漁獵とは關係のない情景を詠じた用例とがあり、後者の場合は歌聲の節をとる爲であるが、舷を叩く點では共通である。ここは、陸游の『入蜀記』の乾道六年六月八日の記事、

小船叩舷賣魚、頗賤。

を参照すれば、恐らくは太湖あたりで捕れた魚を賣りに來た漁師が舟べりを叩き、水路より岸邊の人家または旅中の船等と呼びかけている情景を詠じた句であることが判る。春夫は詩人的直感によってこの箇所を「楫」字に改めたのであろうが、「楫」字に換えると平仄が合わなくなり、管見の及ぶ限りでは、諸本に引く「水檻」の原詩に「楫」

字に作るものは見當らないようである。

こうした問題は、すべて鄭允端に關する基礎資料の不備から生じたものであろう。そこで、小論では先ずその遺詩を輯めた『肅離集』の傳本と問題點について整理し、さらにその現存のテキストに基づいて、殘存詩の特徴から鄭允端の文學觀を考究する。

一 傳本について

『肅離集』の傳本は、現在次の三種を見出すことができる。

①孫毓修編『涵芬樓秘笈』所收『肅離集一卷』

②潘是仁輯校『宋元名公詩集』所收『春慵軒詩集一卷』

③顧嗣立編『元詩選』初集所收『肅離集一卷』

しかし、別集として比較的ととのっているのは①の『涵芬樓秘笈』本のみで、②の『春慵軒詩集』および③の『元詩選』所收本は明らかに選錄本である。『涵芬樓秘笈』本の所收詩は百五十首、「春慵軒詩集」は二十三首、『元詩選』は四十二首であり、後述するように『元詩選』所收詩は殆ど『涵芬樓秘笈』本と變わらないので、じっさいには二系統の傳本と言えらる。

『涵芬樓秘笈』本の底本は手抄本で、卷末に附記された「壬申秋日錄于孺宜堂東廂老迂」の左側には「金侃」「亦陶」の印が捺してある。「孺宜堂」は周知のように、明末の藏書家金俊明の室名であり、孺宜堂の藏本をその子の金侃、字で言えば亦陶が手寫したものを涵芬樓に藏していたことが判る。併せて顧嗣立の編纂した『元詩選』の凡例に、

余家藏元集、合之亦陶手鈔及所借傳是樓本、縱觀採擇、其爲快事。

とあるのに據れば、『元詩選』所收の『肅離集』は、選録の際にこの金侃の抄本を用いていることが判り、さらに『涵芬樓秘笈』本と作品の序列が一致し、字句の異同が殆ど見出せないこともその傍證とならう。

これに對して、『涵芬樓秘笈』本と『春慵軒詩集』との間では字句の異同が目立ち、また収録している作品が多くないにも拘らず、他の明代の婦女詩の總集の採録する所と概ね重なっている状況から見ると、『春慵軒詩集』および明代に流布した婦女詩の總集の基づく所は、『涵芬樓秘笈』本とは別の系統のものではないかと考えられるが、それについては未詳である。但し、いずれの本にも『涵芬樓秘笈』本の百五十首以外の作品は見當らない。次頁に『涵芬樓秘笈』本を基準にして、他の二本および諸選本に於ける作品の収録状況を一覽表にして示しておく。

さて、『肅離集一卷』は黃之雋編『江南通志』卷一九四藝文志・閩秀の部と『四庫全書總目』卷一七四集部・別集類存目(以下『四庫提要』と略す)に記載されているが、『四庫提要』に據ると、『肅離集』の初刻は嘉靖年間(一五三二~六七)で、原詩集には杜寅の後序の他に錢惟善(生没年未詳)の前序があったことになるが、現存の『肅離集』の巻首には自撰の題辭があるだけで、錢惟善の前序は脱落している。杜寅の後序にも「錢君既序其首」とあるので、原本に錢惟善の前序が附してあったことは疑いない。

ところで、『涵芬樓秘笈』の編者孫毓修は、『肅離集』の跋文に於て『四庫提要』の『肅離集』偽書説を採り、贋作が後人の手によって混入された可能性について觸れているが、『肅離集』の中の存疑詩については、從來二點の作品について考證がある。先ず『四庫提要』は

『肅離集』第六十七首の「桃花」(『四庫提要』は詩題を「桃花集句」に作る)の警句「從教一簇開無主、終不留題崔護詩」が楊循吉の『吳中往哲記』では蘇州の李氏の所作になっている點に觸れて疑惑を濃厚にしている。これについては、既に錢謙益が『列朝詩集』閩集・女秀李氏の小傳に於て詳述し、鄭氏の作か李氏の作かを問題にしている。即斷は難しいが、先ずその前に『四庫提要』の詩題呼稱が「桃花集句」とある點、また『肅離集』および『四庫提要』引用の句頭が「從教」であるのに對し、『列朝詩集』の引用では「桃花」に作っている點にも注意を拂っておかねばならない。李氏所作の詩題が「集句」であったのか、それとも鄭允端の原詩が元來集句であったのかは一切不明であるが、少なくとも四庫著錄本には「桃花集句」と記されていたらしい。原詩題或は李氏所作の詩が「桃花集句」であれば、集句の性質として先人の句を引用することは必然である。また、現存の『肅離集』の中に「春詞集句」「秋詞集句」の二首が残っている點からみても、允端が集句を作っていたことは確實であるから性急に結論を出すのは危険であろう。右の記事は顧嗣立の『元詩選』や清末の陳衍の『元詩紀事』にもみえており、大勢は李氏の作が『肅離集』の中に混入したという見解に傾いているように見えるが、錢謙益が結局結論を出せず「姑兩存之、以俟知者」と結んでいる點と併せ考えてみても、これを『肅離集』偽書説の根據にするのは些か無理があるように思われる。

さらに『四庫提要』は、『肅離集』中第四十八首の「碧簫」の尾聯「可笑狂生楊鐵笛、風流何用飲饌盆」の句が瞿佑(一三四一~一四二七)の『歸田詩話』卷下に記載される「香奩八題」の記事に基づいて作られたものと考えると、楊維禎の詩集『鐵崖先生復古詩』所收の「香奩

明清總集及選錄本詩集鄭允端詩所收狀況表

詩題 (『蒲離集』)	元											
	明	清	全	明	清	全	明	清	全	明	清	全
001 山水遊覽	○	○	○									
002 風雨												
003 佳人	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
004 奇衣曲	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
005 雜製												
006 秋夜三五七言												
007 雜詩												
008 雜詩	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
009 對天石												
010 雜詩	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
011 夜聽生齋詩												
012 別起試放												
013 雜詩	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
014 雜詩	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
015 雜詩	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
016 雜詩	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
017 雜詩	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
018 秋夜雜詩	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
019 雜詩	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
020 雜詩二首 (其一)												
021 雜詩二首 (其二)												
022 雜詩												
023 雜詩												
024 雜詩												
025 雜詩												
026 雜詩												
027 文心集												
028 內弟從軍節												
029 雜詩												
030 丙申二月一日聞仲兒死於兵												
031 雜詩												
032 雜詩												
033 高氏甥姻文												
034 花朝風雨												
035 豆飯												
036 雜詩												
037 春白病中												
038 雜詩												
039 雜詩												
040 雜詩												
041 雜詩												
042 雜詩												
043 雜詩	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
044 雜詩												
045 雜詩												
046 雜詩												
047 雜詩												
048 雜詩												
049 紅相甲												
050 中庭對月有感												
051 紅藥題詩												
052 雜詩												
053 雜詩												
054 雜詩												
055 雜詩												
056 雜詩												
057 雜詩												
058 雜詩												
059 雜詩												
060 雜詩												
061 雜詩												
062 雜詩												
063 雜詩												
064 雜詩												
065 雜詩												
066 雜詩												
067 雜詩												
068 雜詩												
069 雜詩												
070 雜詩												
071 雜詩												
072 雜詩												
073 雜詩												
074 雜詩												
075 東鄉院詠花												

詩題 (『蒲離集』)	元											
	明	清	全	明	清	全	明	清	全	明	清	全
076 村少遊春游圖												
077 西窗美人												
078 正面												
079 背立												
080 柳身												
081 半鏡												
082 傷春												
083 落花												
084 游絲												
085 無題												
086 春盡												
087 口占												
088 含露												
089 丘墓												
090 全小												
091 題詞												
092 七夕												
093 秋聲												
094 雜詩												
095 雜詩												
096 雜詩												
097 布衣												
098 雜詩												
099 小感												
100 東坡												
101 李夫人帖												
102 雜詩												
103 問訊												
104 雜詩												
105 石車												
106 贈朱												
107 題詞												
108 雜詩												
109 雜詩												
110 雜詩												
111 雜詩												
112 雜詩												
113 田家												
114 雜詩												
115 雜詩												
116 雜詩												
117 雜詩												
118 雜詩												
119 雜詩												
120 雜詩												
121 雜詩												
122 雜詩												
123 雜詩												
124 雜詩												
125 雜詩												
126 雜詩												
127 雜詩												
128 雜詩												
129 雜詩												
130 雜詩												
131 雜詩												
132 雜詩												
133 雜詩												
134 雜詩												
135 雜詩												
136 雜詩												
137 雜詩												
138 雜詩												
139 雜詩												
140 雜詩												
141 雜詩												
142 雜詩												
143 雜詩												
144 雜詩												
145 雜詩												
146 雜詩												
147 雜詩												
148 雜詩												
149 雜詩												
150 雜詩												

計 231510242212 742 784 4

八詠」序には「至正丙午」とあつて時間的に矛盾することを指摘してゐる。しかし「饜盆」の故事は、明の陶宗儀の編纂した『輟耕錄』にも「金蓮盃」と題し、楊維禎がしばしば宴席で歌妓や踊り子が纏足をしてゐるのを目にするを靴を脱がせ、その上に盃を載せて酒を飲んだ話が記されているように、これは文人楊維禎の日常の奇矯さを示す逸話の一つとして當時ひろく流布してゐたと考えられ、允端の句が必ずしも『歸田詩話』の記事に基づいたものとは断定し難い。

以上二點を論據にして『四庫提要』は現存の詩集を後人の贋撰刊行かと疑い、『元詩紀事』やその他の婦女文學史の專著に於ても、この點のみが擴大強調されている感は否めない。管見では、金侃の手鈔本が流布しなかつたことによる弊害のようにも思えるが、四庫著錄本の依據した底本の素性がさだかでないので、『四庫提要』には「浙江鮑氏恭家藏本」とある。詳論できない。いずれにせよ、他の女流詩人と同様、鄭允端の詩を論ずる際にも、その残存する作品の特質を掘り下げると同時に、個々の作品の眞偽を念頭に置いた考證が必要であらう。

二 自序について

涵芬樓秘笈本『肅離集』の體裁は、①肅離集題辭(自序)②目錄③本篇百五十首(長篇六首・古詩十九首・近體三十四首・絕句八十八首・雜言三首)④杜寅後序⑤孫毓修肅離集跋、のように構成されている。まず鄭允端が自ら記した『肅離集』題辭は、

鄭氏系出貴胄、世尚儒業。父兄以經學教授諸生、著名吳下。某自幼承家庭之訓、教以讀書識字、在後向學。剽竊緒餘、粗知義理。及長歸同郡施伯仁氏、而伯仁又文獻故家、儒雅之士、氣味相類。婦職之暇、尤得操弄筆墨、吟詠性情。

元の閩秀鄭允端の文學

(鄭氏の系は貴胄に出で、世々儒業を尙ぶ。父兄は經學を以て諸生に教授し、名を吳下に著はす。某幼きより家庭の訓を承け、教ふるに讀書識字を以てせられ、後に在りて學に向ふ。緒餘を剽竊し、粗と義理を知る。長ずるに及びて同郡の施伯仁氏に歸ぎ、而して伯仁は又文獻の故家、儒雅の士なれば、氣味相類す。婦職の暇に、尤も筆墨を操弄し、性情を吟詠するを得たり)

と始まり、その家系と婚姻に至る經緯を略述する。これに據れば、允端はかなりの名門の出で、幼い頃より學問を授けられつつ育つたらしい。また嫁いだ先の施伯仁の家も相當な讀書人の家柄であつたことが推測できる。

ところで、この續きには允端の『肅離集』編纂の主旨が語られてゐる。

嘗怪近世婦人女子作詩、無感發懲創之義、率皆嘲詠風月、陶寫情思、纖艷委靡、流連光景者也。余故剷除舊習、脫棄凡近。

(嘗に近世婦人女子の詩を作るや、感發懲創の義無く、率皆風月を嘲詠して、情思を陶寫し、纖艷委靡、光景に流連する者なるを怪しむ。余故に舊習を剷除し、凡近を脱棄す)

僅かに五十字弱ではあるが、ここには彼女のそれまでの女流詩人に對する見解と自負とが率直に述べられている。女性が詩を作ると、決まつて花鳥風月を詠じて情感を述べるといったものばかりで、獨創性がない。こうした從來の婦女子の惡習を一掃し、まったく新しい發想で詩を作るべきである、とこの女詩人は主張するのである。彼女が從來の女流詩人に目を向け、確固たる文學意識を持つて作詩を試みてゐる點は特筆に値するものと言えよう。では、具體的に鄭允端の文學觀がどのようなものであつたかが問題になるのであるが、それは殘念なが

らこの題辭の中には示されていない。その解答は作品の中に見出すし
かないようである。その際に更に留意すべき點として、題辭の續きに
みえる、

作爲歌詩、緘諸篋筒、以俟宗工斤正、然後出示多人。今抱病彌
年、垂亡有日、懼湮沒而無聞、用寫別楮、詮次成帙。藏諸家塾、
以示子孫。

(歌詩を作爲して、諸を篋筒に緘じ、以て宗工の斤正を俟ち、然
る後に出して多人に示さんとす。今、病を抱きて年に彌り、亡す
るに垂んとすること日有り、湮沒して聞こゆる無きを懼れ、用て別
楮に寫し、詮次して帙を成す。諸を家塾に藏し、以て子孫に示す)
という遺言的な一節も、この詩集を紐解く上で重要な意味を持つと思
われる。これに杜寅の後序にみえる記事、

伯仁哀而傷之、遂發其篋、得詩若干首、名肅離集。其失亡者過
半。

(伯仁哀みて之を傷み、遂に其の篋を發きて詩若干首を得、肅離
集と名づく。其の失亡せる者、半ばを過ぐ)

を重ねてみると、傳若金(新隲の人、字は汝礪、一三〇四・四三)がやは
り薄命であった妻の孫蕙蘭の死後、その手稿十八首および斷句二十六
句を編集して『緣窗遺稿』と名付けた経緯に酷似している點も非常に
興味深い。

三 題材をめぐる特質

『肅離集』を従來の女流詩人の作品と比較した場合、その題材に大
きな特徴がある。鄭允端の詩は、教訓的な要素を色濃くもつ詩と、詩
畫一致の視點から創出したと考えられる題畫詩および象徴詩の二種類

に大別できる。

小論ではそれらのうち、従來の女流詩人には殆ど取り上げられるこ
とのなかつた題材、即ち題辭にも伺える、鄭允端の文學の核を成す女
訓的な側面に絞って、若干の卑見を述べることにしたい。尙、ここに
提出する作品は、その特色をより明確にする爲『肅離集』の序列には
こたわらず、讀後感・實踐訓・故事・樂府題の詩・鄭允端固有の詩、
の順に検討を試みた。故に、引用詩題下に『肅離集』に於ける序列を
示す番號を記しておく。

班氏世文獻	班氏は文獻を世ににし
有此賢大家	此の賢大家有り
芳名久而著	芳名 久しく著はれ
文采美且都	文采 美にして且つ都なり
女篇述訓誠	女篇もて訓誠を述べ
婦道眞楷模	婦道は眞の楷模
斂衽再三讀	斂衽して再三讀み
敬佩母敢渝	敬佩して敢へて渝はる母し
予聞太倉公	予聞く 太倉公の
逮繫長安獄	長安の獄に繫がるるに逮ぶや
生女不生男	女を生むも男を生まざれば
緩急無以囑	緩急に以て囑する無し
少女痛所言	少女 言ふ所を痛み
上書訴父辱	上書して父の辱を訴ふ
死者不復生	「死者は復た生きず
刑者不可屬	刑者は屬ぐべからず

(『讀曹大家女賦七篇』031)

妾身没入官

父罪或見贖

明明聖文王

哀憐脱戕毒

再使父子親

骨肉重相續

此事誼甚高

足以振頹俗

好事東觀臣

大書耀史錄

臨卷三歎之

清風滿林麓

妾が身 没して官に入らば

父の罪 或は贖はれん

明明たる聖文王

哀憐して戕毒を脱せしめ

再び父子をして親しむ

骨肉をして重ね相續がしめよ」と

此の事 誼甚だ高く

以て頹俗を振ふに足る

好事なり 東觀の臣

大書して史錄に耀かしむ

卷に臨みて之を三歎すれば

清風 林麓に滿つ

〔讀西漢書〕001

まずこの二首は、閑讀した書物に見出された女性の生き方を詠じたもので、いずれも女性が世の模範をつくった例が題材に選ばれている。

前者の「讀曹大家女誡七篇」はこの女詩人が『女誡』に記されている思想内容に傾倒していたことを示す決定的な詩で、特にこの『女誡』七篇は「曹大家」と尊稱された漢の班昭が、高齡の病床から嫁いでゆく娘たちに言い残した、新婦の心得を簡素に記した家庭の子女訓であり、先にも觸れた、晩年の鄭允端の境遇と重なる點も注目される。後者の「讀西漢書」にみえる傳記は『漢書』刑法志によるもので、ここには父親に存在價值を否定された娘の發奮が描かれ、孝のため身を賭しての活躍をした、健氣な娘緹縈への賞賛が主題となっている。

良人有行役

晨興具蒸炊

良人 行役有り

晨に興きて蒸炊に具ふ

元の閨秀鄭允端の文學

抱甕汲江水

刈我園中葵

義在中饋間

敢辭力作疲

夙夜無違事

欽哉衿袿辭

甕を抱きて江水を汲み

我が園中の葵を刈る

義は中饋の間に在り

敢へて辭せんや 力めて疲を作すを

夙夜 違ふ事無かれ

欽しめや 衿袿の辭

〔早起〕024

この五言古詩は以下に述べてゆく他の作品とは一風異なっており、故事による教訓ではなく、いわば實踐訓ともいふべき、日常の生活の中から滲み出てきた教訓の詩のようである。表題は『女論語』第四章と同一のもの、七・八句の「夙夜無違事、欽哉衿袿辭」は、『儀禮』士婚禮および劉向の『列女傳』等の記事に基づく表現で、直前の二句と相俟て女性が家事にいそしむべきことを述べる。これはいわゆる禮教を裏付けとした傳統的な生き方を詠じたもので、彼女の育ちから自然に現れたものであろう。

兩子相隨淚暗垂 兩子 相隨ひて涙暗に垂れ

此情欲去又躊躇 此の情 去らんと欲して又躊躇す

沈思暫斷山家夜 沈思す 暫斷 山家の夜

誰肯流傳到畫骨 誰か肯て流傳して畫骨に到らしめしや

〔蔡文姬別處圖〕003

これは後漢の蔡琰（字は文姬）が獻帝の興平年間に胡騎に劫め去られ、南匈奴の左賢王の夫人となって二子を生み、再び曹操の手によって中原に連れ戻されたという著名な故事をモチーフにした絶句（題畫詩）で、いわゆる女訓を詠じた詩とは異なるが、ここには異民族の介入によって起こる悲劇と、戦亂に巻き込まれて道具のように扱われ、人格

を無視された現實の女性像とが見事に描出されている。また、詩全體から伺える母子別離の情に對する問いかけも、鄭允端の他の女訓的な詩に共通する思想の一つでもある。

邯鄲秦氏の女

邯鄲 秦氏の女

辛苦爲蠶忙

辛苦 蠶の爲に忙し

凌晨行採桑

晨を凌ぎ 行きて桑を採り

采采不盈筐

采り采るも 筐に盈たず

使君從南來

使君 南より來り

五馬多輝光

五馬 輝光多し

相逢在桑下

相逢ひて桑下に在り

遣我雙明璫

我に雙明璫を遣る

聽婦前致辭

婦の前まへみて辭を致すを聽くに

卑賤那可當

「卑賤 那ぞ當るべけんや

使君自有婦

使君 自ら婦有り

羅婦自有郎

羅婦 自ら郎有り

請君上馬去

請ふ 君馬に上りて去れ」と

長歌陌上桑

長歌す 陌上桑

婉彼魯姬姜

婉たる彼の魯の姫 姜

出采林下桑

出でて林下に桑を采る

遠人何處來

遠人 何處よりか來り

下馬古道傍

馬を下る 古道の傍

黃金致微言

黃金もて微言を致す

少年與貴郎

「少年 貴郎と與り

婦人秉素心

婦人 素心を秉り

〔羅敷曲〕010

鐵石填衷腸

鐵石 衷腸に填む

豈爲物所移

豈に物の移す所と爲りて

古井波瀾揚

古井に波瀾を揚げんや」と

爲謝道旁子

爲に謝す 道旁の子

請歌行露章

請ふ 「行露の章」を歌はん

〔秋胡戲妻卷〕018

この二首は、ともに『列女傳』に登場し、且つ樂府題にもよくみられる、内容的にも非常に類似した五言古詩である。まず前者の「羅敷曲」は、女の心意氣が主題で、權威に屈せず、貞を固く守つてどこまでも貫く姿勢と、貧しくとも高潔な心をもつことを賞賛した、多分に女訓的な要素の強い作品になっている。一方、後者の題畫詩「秋胡戲妻卷」に於ては、本來劉向が『列女傳』で示そうとした秋胡子夫妻譚の核心を成す夫の不孝に對する訓戒には觸れていない點が注目される。つまり、允端の女訓的な詩に於ては男性への非難は含まれていないわけで、これは『女誡』にみえる夫への敬愼の思想の影響とも考えられる。また、ここでも富貴を優先するあまり夫婦が離別してしまうことの罪惡が強調されている。

女子謂嫁而曰歸

女子の嫁するを謂ひて「歸」と曰ふ

一與之齊終不移

一たび之と齊へば終に移らず

豈以貧賤易所守

豈に貧賤を以て守る所を易へ

百年恩愛生別離

百年の恩愛 生きながら別離せんや

君不見

君見ずや

會稽愚婦輕夫婿

會稽の愚婦 夫婿を輕んじ

一朝厭棄長辭去

一朝 厭棄して長へに辭去するを

空歌之死矢靡他

空しく歌ふ「死に之るまで矢ひて他靡し」と

柏舟難繼共姜衛

柏舟 繼ぎ難し 共姜の衛

(「愚婦行」002)

種花莫種官路傍

花を種うるも官路の傍に種うる莫かれ

嫁女莫嫁諸侯王

女を嫁するも諸侯王に嫁する莫かれ

種花官路人取將

花を官路に種うれば人取り將ち

嫁女王侯不久長

女を王侯に嫁せば久長ならず

花落色衰情變更

花落ち色衰れば情變更ひ

離鸞破鏡終分張

離鸞 破鏡 終に分張る

不如嫁與田舎郎

如かず 田舎郎に嫁し與へ

白首相看不下堂

白首まで相看て堂を下らざるに

(「吳人嫁女辭」003)

最後に掲げる二點の作品は、ともに前掲の「羅婦曲」「秋胡戲妻卷」に類似する點もあるが、こちらは允端獨自の見解を盛り込んだ七言の古詩になっている。まず前者の「愚婦行」は樂府題の詩であるが、郭茂倩の『樂府詩集』にその題は見えない。第二句は恐らく『禮記』『小學』といった經書の表現を借りたもの、末二句は『詩經』からの引用であることは明白である。途中に朱買臣の故事を挟み込んだのは、朱買臣が彼女と同じく吳人であること、また韻文體で女訓を述べる當時通行の書物に、例えば『女論語』のように愚婦を例にとつて戒める形式が多かつたことの反映とみることもできよう。この古詩が女訓書のような堅苦しさを持たずに感じられるのは、親しみ易い民間傳承の故事をベースに詠じられているからとも言える。このことは重要な意味を持つており、讀み手の對象を家訓のように身内に限定していないことが考えられる。後者の「吳人嫁女辭」も前者に同じく、允端固有の獨創的な作品である。すべての句末字を陽韻に揃え、一問一答形式で

讀み手に語りかける方式は、やはり讀み手の馴染み易さを計算した表現とみてよく、詩題下に添えられた序文、

余見尋常百姓家、多以女嫁達官貴人、雖夸耀于一時、而終不得偕老。故作是詩以警之。時至正丙申歲也。

(余尋常の百姓の家を見るに、女を以て達官貴人に嫁するもの多く、夸に一時に耀くと雖も、終に偕に老ゆることを得ず。故に是の詩を作りて以て之を警む。時に至正丙申の歲なり)

の年號に據れば、鄭允端の亡くなる年にあたり、あたかも班昭のように、吳下の女性たちへ言い残した句であることが判る。これは庶民が一時的な榮華を求める傾向にあって、恒久的な幸せを願みない點を憂い、貴族階級への憧憬がいかに空しいものであるかを庶民に訴えようとした詩であり、ここに詩人の、女性が立身出世の道具として扱われる現實への非難と、女性が個人的な幸福を追求する權利のあることを主張しようとする姿勢が伺える。この二つの作品に共通する要素として、先ず女性に關わる著名な故事を引用して表現を試みている點が挙げられる。また内容方面では、富貴の身分を否定する點、および「夫婦偕老」を幸福の條件とする點が共通の主題であり、これは鄭允端の詩作の底邊にある思想とみてよいと思う。當時にして、一般の榮達を目的とする物質的な充足よりも、精神的なそれを第一とする發想の轉換がここに伺え、またそこに從來の女性詩人にみられない彼女獨自の詩風が生まれたと考えられる。

四 詩作の背景と創作意圖

さて、では何故に鄭允端はこうした詩を作ったのであろうか。その原因として、第一に彼女の家柄が挙げられる。允端は前記の『肅離

集』題辭に據れば、儒者の名門の家系に生まれ、父兄は儒學教育を生涯とし、その名は吳下でも知られた家柄であつたらしい。顧嗣立の編纂した『元詩選』小傳、

允端、字正淑、姓鄭氏、宋丞相清之五世孫女也。其大父通判吳郡、徙居焉。饒于貨、有半州之目、世稱花橋鄭家。

(允端、字は正淑、姓は鄭氏、宋の丞相清之の五世の孫女なり。

其の大父は吳郡に通判たり、居を徙す。貨に饒にして、半州の目有り、世と花橋の鄭家と稱す)

に記載される鄭允端の生家のあつた「花橋」は、『姑蘇志』卷十七・坊巷の東北隅巷六十八のうち第四十九に「花橋巷」と記される巷名で、『宋平江圖』及び『長洲縣志』卷首の「長元吳三邑圖」東北部にみえ、現在も花橋を挟む陋巷は「西花橋巷」「東花橋巷」と呼ばれる。この地區が當時の大土地所有者密集區であることからも、鄭氏一族が吳下では著名な資産家であつたことが推測されるのである。富裕な家庭に生まれた彼女が、幼少より家訓を授けられ、後、詩文に巧みな一女性に成人した旨が、題辭に彼女自身の言葉で綴られている。これは當時の貴人階級に於てはごくふつうのことで、先に掲げた同時代の孫蕙蘭が、父親の孫周卿によつて「孝經」「女誡」を教え込まれる記事等も参考になる。黄之雋等編『江南通志』卷一七六人物志・才媛の部には、

嫁同郡施伯仁、嫻内則、能詩文。(中略)宗族私諱曰貞懿。

(同郡の施伯仁に嫁ぐ。内則に嫻ひ、詩文を能くす。…宗族私に諱して貞懿と曰ふ)

と記載され、『長洲縣志』卷二十八・列女の部にも同様の記事がみえている。こうした成長期に於ける経緯が、後の彼女の文學觀を形成す

る下地になつてゐることは言ひまでもない。じつさい、彼女自身相當に名門出を意識する女性であつたらしく、題辭もその自尊心と文學への信念で満ち溢れている。また彼女が生涯の幕を閉じた際に、施伯仁がその殘存詩集の表題を、『詩經』國風の召南にみえる、

何彼襍矣 何ぞ彼の襪なる

唐棣之華 唐棣の華

曷不黼黻 曷ぞ黼しみ黻らざらんや

王姬之車 王姬の車

に據つて「肅雝」と名づけたのも、恐らくは詩序に記す、

美王姬也。雖則王姬、亦下嫁於諸侯。車服不繫其夫、下王后一等。猶執婦道、以成肅雝之德也。

(王姬を美むるなり。則ち王姬なりと雖も、亦た諸侯に下嫁す。車服其の夫に繫けず、王后に下ること一等のみ。猶ほ婦道を執りて、以て肅雝の徳を成すなり)

を念頭に置いていたのであろう。理想的な人格として彼女に「貞懿」と諡號を贈つた宗族の人物評をもそこに込めていたと考えられる。

『四庫提要』の解題に記録される『肅雝集』の別本の表題『姑蘇鄭姬詩集』の「鄭姬」にしろ、『元詩選』小傳および『江南通志』に記される「貞懿」と諡されたという記事にしろ、單に彼女が貞淑な妻であつたと言ふばかりでなく、事實、彼女の家柄が名門であり、幼少時より内則を教え込まれて成長した一流人意識が誇張されているように讀みとれる。『肅雝集』に収録される作品の詩題にも「讀西漢書」、「讀白虎通」、「讀史」(副題「伏讀嚴顏傳」)、「讀文山丹心集」、「讀曹大家女誡七篇」、「讀春秋」のように彼女が閱讀した經書や史書が散見し、鄭家に於ける教育の痕跡が明確に息づいてゐるのである。

また第二に、病のために餘命幾許もなくなった詩人の、子孫やその他後世の女性への遺言として記したものであろうことは、先に掲げた『肅離集』題辭や「吳人嫁女辭」の序文からも明白である。ここでは詳述しないが、鄭允端の詩のもう一つの特質として、晩年の詩情と密接な関わりをもつ要素、即ち題畫詩に垣間見る詩畫一致の視點から創作を試みた作品があることは、先にも觸れた通りである。籠居によつて病を患い、その爲闔房より一步も出られなくなったこの女詩人が、畫を見ることを僅かな楽しみとしているのは、病床に於ける作品や題畫詩の詩情が如實に示している。

そして第三には、時代の要求もあつたであろうことが推察される。鄭允端の作品には、在來のひたすら女訓を遵守する受身の姿勢から、積極的に幸福を追求する近代的な考え方への脱皮がみられることから、『肅離集』題辭に記された彼女の言葉には、女流文學を單なる言葉の遊びではなく、もっと有意義な、實生活に役立つものにできないものか、という主張が隠れているように思われてならない。

結 語

以上、小論では『肅離集』より女訓的な色彩の濃厚な詩を拾い出して検討してみたが、本格的に文學に参加する機會の少なかつた中國女性の詩文に於て、鄭允端の詩のもつ特異性は、やはりその女性の立場で、女性の爲の文學を構築しようとしている點にあると考えられる。鄭允端はその短い生涯の中で、男性に奉仕する爲に教育されてきた傳統に則りながらも、ただそれに盲従することなく、女性がどうあるべき幸福であるのかを文學の中に模索していた。

舊中國に於ては、歴代禮教に沿つた女性教育を推進すべく、男女兩

性の側から夥しい數の女訓書が作られている。一方、女性はその拘束より逃れる術を追い求め、反儒家的精神を旺盛にして活動するケースも多く、例えば唐代の妓女文學等にはその一端が覗いている。ところが、この『肅離集』にはそうした傾向の詩が殆どみえていない。それは詩題を一望しても明らかである。贈答詩も少なく、代わりに題畫詩や詩人の日常周邊——例えば懷妊した喜び（辛卯立春得子²⁰）等——を綴つた景景詠物の詩で占められている。このことは、從來の女性文學の作風に比して、特筆すべき點としてもよいと思う。

女性にとつての詩が文學として意識されるようなものではなく、禮教的拘束を苦痛と感じながら、嫁いだ先での身の不遇を歌う、言わばフラストレーションの捌け口であつたり、或は藝妓のように詩作即ち生活手段であるといった型が宋以前の主流であつた。確かに中國の婦女文學史上はそうした面も色濃く繼承されてゆくのであるが、同時にまた、必ずしも女性詩即情詩と決めつけてしまうのも危険である。ともすると、解放以前の中國に於ては女性文學など皆無であるかのように切り捨ててしまふ言論もしばしば耳にするが、それは誤りと言つてよい。女性の手に成る古典詩歌の中にも、独自の文學を強く意識し、その精神的自立を促すものが、確かにこうして存在するのである。

注

- (一) 張玉嬪については『松陽縣志』に記載される傳および明の王詔の記した傳があり、その著『張大家蘭雪集二卷』は李之鼎輯『宋人集』・陶湘輯『託跋廬叢書』に收められている。管道昇は『烏程縣志』に傳があり、その著『墨竹譜一卷』は『續百川學海』・『說郛』（宛委山堂本）・『綠窗女史』等所收。孫蕙蘭の『綠窗遺稿一卷』は『元詩選』初集壬集。

『四婦人集』(嘉慶本)、『嘉慶堂叢書』等所收。

(2) 關西大學東西學術研究所編『江戸時代における唐船持渡書の研究』によると、享保八癸卯年の『商舶載來書目』にみえる。因みに、『大意書』には「名媛詩歸、壹部壹套六本、但脱紙五張、古本蟲喰竝青點入」とあるので、國立公文書館内閣文庫(紅葉山文庫)藏本は別本であることが判る。

(3) 顧嗣立編『元詩選』の小傳にみえる「至正丙申、張士誠入平江、家爲兵所破、鬱鬱致病而卒、年僅三十」の記事に據れば、鄭允端の生没年は確實に十四世紀である。

(4) 引用文中にみえる「村惡」を奥野は「冷酷な性格」と譯しているが、管見では明代の小傳に記載される「惡」字を清朝の文獻(例えば『歷朝名媛詩詞』の小傳等)では「俗」字に改めている點からみて、「村惡」の語義も恐らく「野暮」「田舎者」程度の意味ではないかと思われる。

(5) 羅振玉輯『元人選元詩五種』(『河汾諸老詩集』、『國朝風雅』、『大雅集』、『敦交集』、『偉觀集』)及び姚培謙等編『元詩抄』、符觀編『元詩正體』には鄭允端の作品はとられていない。

(6) 『肅離集』に關する『四庫提要』の全文を以下に掲げておく。

肅離集一卷。浙江鮑士恭家藏本。舊本題元女子鄭允端撰。允端、字正淑、平江人。宋丞相潛之五世孫女。歸同郡施伯仁。至正丙申、張士誠入平江、家爲兵所破、貧病恒恒而卒、年僅三十。集首有敘傳。紀其始末。集爲允端沒後、伯仁哀其遺棄而成、錢瑯錢惟善、青城杜寅爲作前後序。

明嘉靖中其五世孫仁始刻之。其詩詞意淺弱、失粘落韻者、不一而足。錢惟善等皆一代勝流、不應濫許至是。考集中桃花集句所謂從教一簇開無主、終不留題崔護詩者、楊循吉吳中往哲記以爲蘇州李氏女子所作。或正德間是集未刻、循吉偶爾傳謄。至於碧筒一首作於王夫人席上者、結有可笑狂生楊鐵篋、風流何用飲饜金句。鐵篋、楊維禎號也。與允端雖同時人、然瞿宗吉歸田詩話稱、維禎過宗吉叔祖士衡家、以香奩八題見示、依

其體作八詩以呈。維禎稱賞、因以饜金命題。宗吉作沁園春云云。宗吉雖不著年月、而鐵篋復古詩中香奩八詠、有維禎自序、稱至正丙午春三月。宗吉先和詩而後詠饜金、又必在丙午之後。以允端小傳考之、是時已沒十年矣。安得聞饜金之事。此殆允端原有詩集、歲久散佚。而其後人贗撰刊行、但知維禎饜金事在元末、而不知有年月可考也。又有萬歷丁酉江盈科序、稱改題其名曰姑蘇鄭姬詩、尤爲妄作。如以姬爲鄭姓、則其事太古、漢唐以下無此例。如以姬爲女子之美稱、則見與蔡京等矣。今仍以原名肅離集存其目焉。

(7) 『肅離集』跋に「四庫入存目、提要譏其詩詞意淺弱。然錢惟善等一代勝流、已極口稱許。提要因碧筒一詩、疑允端原有詩集、歲久散佚、其後人贗撰刊行。今觀其自序、則此出鄭氏手。定後世好事者、以他人之作羸入集中。固未可知、謂盡屬贗撰、恐未必然也」とある。

(8) 『列朝詩集』閩集・女秀李氏の小傳の全文を以下に掲げておく。

楊循吉吳中往哲云、女秀一人、李氏、洪武間人。有集一卷。警句曰、桃花一簇開無主、終不留題崔護詩。其思正矣。此詩載鄭氏肅離集中。曲江老人錢惟善及汴人杜寅爲序傳曰、鄭氏允端、字正淑、宋太師尚書左丞相魏國清之後。居吳中、號花橋鄭家、嫁同郡施伯仁。能詩文、嫻內則。至正丙申、妖兵據城、家爲盜所破。年三十、得疾而卒。宗族私諡曰貞懿氏。有集曰肅離、自爲之序。君謙博學多聞、記載吳故最嚴、而此詩屬諸李氏、且云有集一卷、豈君謙偶失考耶。抑別有李氏一集耶。姑兩存之、以俟知者。

(9) 『鐵篋先生復古詩』所收の「香奩八詠」の序に「至正丙午(一三五六)春三月初吉、錦窈老人楊維禎序」とあり、鄭允端の没年が至正丙申(一三五〇)であるから、鄭允端がこの記事を知ることとは不可能である點を『四庫提要』は述べている。

(10) 陶宗儀編『輟耕錄』卷二十三に「楊鐵篋耽好聲色。每於筵間、見歌兒舞女有纏足鐵小者、則脫其鞋、載之以行酒、謂之金蓮盃」の記事がみ

える。

(11) 矢澤利彦氏がその著『西洋人の見た十六、十八世紀の中國女性』

(一九〇〇年・東方書店)の中で指摘されている明代に於ける高貴な身分にある女性の簡居は、すでに元末には習慣となっていたらしく、若くして病に倒れる女性詩人が目立つ。専門醫の談に據れば、ことに水氣の多い江南地區に於ては抗酸菌の一種である結核菌の活動が活潑で、簡居という奇習がこれを促進する結果になったことは否めない、という。鄭允端の作品にも病床の作は十一首(殘存詩の約7%)あり、「臥店」(041)にみえる「病瘡」「骨立瘦」「煩熱」等の表現から推察するに、久しく肺病に犯されていた可能性が高く、閨の窗邊より詩を吟ずる生活が讀み取れる作品も目につく。題畫詩が多く、さらにその題畫詩中に所謂「道情」のような道教的な要素が散見するのも、病に起因するものではないかと考えられる。

(12) 『後漢書』卷八十四・列女傳七十四曹世叔妻傳所收。

(13) 『漢書』卷二十三・刑法志に「即位十三年、齊太倉令淳于公有罪當刑、詔獄速繫長安。淳于公無男、有五女、當行會逮、罵其女曰、生子不生男、緩急非有益也。其少女繩繫、自傷悲泣、乃隨其父至長安、上書曰、妾父爲吏、齊中皆稱其廉平、今坐法當刑。妾傷夫死者不可復生、刑者不可復屬、雖後欲改過自新、其道亡繇也。妾願沒入爲官婢、以贖父刑罪、使得自新。書奏天子、天子憐悲其意、遂下令曰、(後略)」とある。

(14) 『儀禮』土婚禮に「母施衿結纁曰、勉之敬之、夙夜無違宮事」、列女傳「卷四貞順・齊孝孟姬の傳に「父母送孟姬不下堂。母離房之中、結其衿襜、戒之曰、必敬必戒、無違宮事。父誠之東階之上曰、必夙興夜寐、無違命。其有大妨於王命者、亦勿從也。諸母誠之兩階之間曰、敬之敬之。必終父母之命。夙夜無怠。爾之衿襜、父母之言謂何。姑姉妹誠之門內曰、夙夜無怠、爾之衿襜、無忘父母之言」とある。

(15) 『後漢書』卷八十四・列女傳七十四所收の「悲憤詩」に「邂逅徵時

願、骨肉來迎已。已得自解免、當復乘兒子。天屬綴人心、念別無會期。存亡永乖隔、不忍與之辭。兒前抱我頸、問母欲何之。人言母當去、豈復有還時。阿母常仁惻、今何更不慈。我尚未成人、奈何不顧思。見此崩五內、恍惚生狂癡。號泣手撫摩、當發復回疑。兼有同時輩、相送告離別。慕我獨得歸、哀叫聲摧裂。馬爲立踟躕、車爲不轉輒。觀者皆歎歎、行路亦嗚咽。(後略)」とある。

(16) 郭茂倩『樂府詩集』卷二十八・相和歌辭三・陌上桑三解、および『西京雜記』卷六、『列女傳』卷五(魯秋潔婦)、郭茂倩『樂府詩集』卷三十六・相和歌辭十一・秋胡行四解参照。

(17) 『禮記』郊特牲に「信、婦德也。壹與之齊、終身不改。故夫死不嫁」とあり、『小學』明倫にも同一箇所引用がある。

(18) 『詩經』鄘風・柏舟に「汎彼柏舟、在彼中河、鬢彼兩髦、實維我儀之死矢靡它、母也天只、不諒人只」、詩序には「柏舟、共姜自誓也。衛世子共伯蚤死、其妻守義、父母欲奪而嫁之、誓而弗許。故作是詩以絕之」とある。

(19) 『漢書』卷六十四上に「朱買臣字翁子、吳人也。家貧、好讀書、不治產業、常艾薪樵、賣以給食、擔東薪、行且誦書。其妻亦負戴相隨、數止買臣毋歌嘯道中。買臣愈益疾歌、妻羞之、求去。買臣笑曰、我年五十當富貴、今已四十餘矣。女苦日久、待我富貴報女功。妻恚怒曰、如公等、終餓死溝中耳、何能富貴。買臣不能留、即聽去。(中略)入吳界、見其故妻、妻夫治道。買臣駐車、呼令後車載其夫妻、到太守舍、置園中、給食之。居一月、妻自經死。買臣乞其夫錢、令葬」とある。

(20) 明正德元年序刊本(内閣文庫藏)に據る。

(21) 蘇州城内の文廟に附屬する碑刻博物館に保存される。南宋・紹定二年(一二二九)刻、清末に深刻。

(22) 清乾隆十八年序刊本及び乾隆三十年刊本(内閣文庫藏)に據る。

(23) 伊原弘氏の「江南における都市形態の變遷—宋平江圖解析作業—」

『宋代の社會と文化』昭和五十八年・汲古書院）に明・清時代の蘇州の都市形態についての詳しい研究報告がある。

(24) 顧嗣立編『元詩選』初集・壬集にみえる孫淑の小傳に「汝礪序其遺稿曰、故妻孫氏惠蘭、早失母。父周卿先生以孝經女誠教之、詩固未之學也」とある。

(25) 清乾隆二年序刊本（内閣文庫藏、昌平坂學問所本）に據る。

(26) 病床の作十一首「病起試杖」(012)・「花朝臥病」(034)・「春日病中」(037)・「臥店」(041)・「久病」(044)・「病起」(073)・「傷春」(081)・「落花」(082)・「無題」(084)・「秋窗書懷」(093)・「閨思」(094)にみえる詩情、「撫卷」の語彙の用例三首「撫卷空歎息」(「閨思」牧圖 008)・「撫卷爲盤桓」(「題畫」043)・「撫卷發深思」(「毛女」129)やその他「自娛披玩每忘倦」(「倪元鎮畫」023)といった表現からも詩人の平生が伺える。また、こうした傾向から、殘存詩の大半が晩年の作品であることも判る。

補記

本稿は第四十五回日本中國學會大會に於ける口頭發表の内容に加筆したもので、その際に村上哲見先生、恩師船津富彦先生他、諸先生より懇切なご教示を賜りました。ここに記して感謝の意を表します。